

佐伯史談会入会

平川 マサ

(会員 佐伯市城南町)

夫がなくなつて二十二年が過ぎました。葬儀の日はまだまた史談会の役員会があつたとかで、会葬出来なかつたからと、翌日、当時の高木会長、羽柴先生、そして岩田義市先生が仏様にお参りしてくれました。(このお三方も今では黄泉の国の人になりました。)

そのとき、羽柴先生から「平川先生の後を継いで、奥さんも史談会会員になつて下さいな。」と言われて、二つ返事で入会させてもらいました。それにしても、何も分らないのに入会後すぐに役員にさせられました。その当時女性の役員は私一人でした。羽柴先生は事あるごとに紅一点の平川さんと呼んでくれましたが、面はゆいことでした。

私にとっては第一回の役員会が羽柴先生のお宅でありましたが、その内容は私には雲をつかむようなことばか

りで、こんなことで、みなさんについて行けるのだろうか、不安で一杯でした。その日は羽柴先生の奥さん手作りの折り箱に入ったお弁当が出ましたが、心のこもつたお弁当の味は今でも心に残っています。

昭和五十三年三月十九日、佐伯史談会発足二十周年記念行事として、龍護寺で物故会員慰霊祭が執り行われました。私達物故者の家族が招待されました。

改めて、観音堂の前で写つたそのときの記念写真を見ますと、物故者になられた方々のお顔も多く、年月の流れの中で史談会の歴史を造りあげて下さつた方々に頭が下がります。

四国八十八ヶ所研修旅行

入会して間もなく三泊四日の四国研修旅行がありました。(昭和五十三年十一月三日)羽柴先生がわざわざ我が家まで足を運ばれて、「お参りしましょうや。清先生のご供養になりますよ。」と誘つて下さいました。

この旅行は私にとって初めて参加する研修旅行でもありました。申込みが多くて二回目の旅行も出るようになりました。

さて、十一月三日文化の日に羽柴先生は大分県教育委員会から教育功労者として表彰を受けられました。丁度運悪く、四国旅行と重なって先生は参加出来ませんので、その代理として清田先生が代わってお世話して下さいました。この旅行で初めて清田先生との出会いがありました。お会いしたときは（一寸近寄りにくい方だなあ）と思いましたが、四日間の旅行で清田先生のやさしいお心に触れて、それからもずっとご指導賜りました。

副会長の役を引受けて

高木会長さんが高齢のためその役を引かれ、塩月佐一先生が替わってその後を引き受けてくれることになりましたが、塩月会長さんも間もなく体調を崩されて、次に山本保先生が会長の役に付きました。山本会長さんの補佐役として、清田副会長さんの後を継いで私に副会長の役が回って来ました。

あれは蒲江で文化財研修会があったことです。宇目の軸丸勇先生からお話がありました。軸丸先生は玖珠史談会の会員でもあります。玖珠史談の送料は三十円

（当時）なのに、なぜ佐伯史談は百七十円の送料を支払っているのか。これは「学術刊行」の指定を受けていないからだ。早速研究してみてもどうかと助言して下さいました。

その当時、佐伯郵便局の郵便課に勤務していた親せきの者に相談すると、学術刊行に関する本を三冊も貸してくれました。目を通しましたが中々むつかしくて要領を得ませんでした。それで玖珠史談会事務局長の甲斐素純さんに電話で相談しましたところ、大変親切に説明してくれました。その後、何度も電話で知恵を借りて助けてもらいました。やっとこれなら郵政省に出せる段階までにこぎつけましたので、事務局長の佐藤巧さんから書類を作ってもらいました。認可されなくてもとと言う気持で郵政省に送りました。

学術刊行の認可を受けるには、郵政省の査定が六月と十二月にあります。佐伯史談会は七月に出したのでから十二月まで待ちました。暮れも押し詰った十二月二十九日の寒い夜のことです。山本会長さんが「郵政省から届きましたよ」と分厚い認可の書類を届けてくれました。

「天に登る心地」とはこういうときに使う言葉でしょうか。山本会長さんが帰られた後で一人で万歳を三唱しました。早速このことでお世話になった方々に、その夜の内に電話で報告してお礼申し上げます。

後で聞いたことですが、羽柴先生も塩月先生も学術刊行のことは投げ出したと聞いていますのに、三代目で認可されたことは私は運がよかったとしか考えられませんが、これも私を助けて下さった方々がいたからこそと、感謝の気持で一杯です。

私は副会長を九年間勤めさせてもらいましたが、その間、この学術刊行の認可を得たことは、史談会に一つ大きな功績を残したと自分自身に拍手を送りたいと思っております。これも会員の皆様に助けられてのことです。

佐伯史談会発足四十周年に当り、ますますのご発展を心からお祈りいたします。

